

B 型肝炎ワクチン予防接種を受けるにあたっての説明

● B型肝炎とワクチン

主として血液を介して感染するウイルス性肝炎であり、母子感染や輸血だけでなく、知らない間に罹ることもあり、感染者は日本で約100万人（約100人に1人）と推定されています。

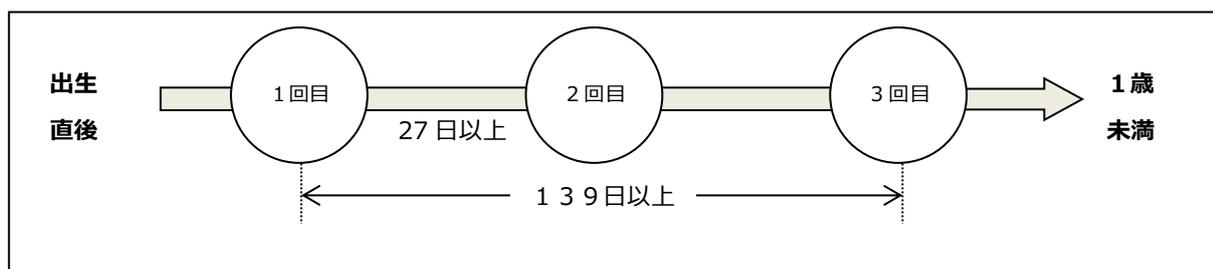
感染後の経過としては、全身倦怠感、食欲不振、悪心、嘔吐などから黄疸を発症し、そのまま回復する一過性感染と、症状としては明らかにならないまま、ウイルスが肝臓の中に潜み、年月を経て慢性肝炎・肝硬変・肝がんなどになる持続感染があります。ことに年齢が小さいほど、ウイルスや細菌を排除するための仕組みが未発達なため、ウイルスがそのまま潜んでしまう持続感染の形をとりやすいことが知られています。この持続肝炎を防ぎ、将来発生するかもしれない慢性肝炎の発生を防ごうとすることが小児へのB型肝炎ワクチン接種の最大の目的です。

酵母由来の組換え沈降ワクチンが用いられ、十分な免疫を獲得するには、2回目まででは不十分で、3回目の接種が大事になり、ワクチンの効果は20年以上継続すると考えられています。

● 接種年齢：出生直後～1歳未満

（標準的な接種の開始は、生後2か月から）

● 接種スケジュール：計3回



● 主な副反応

まれにおこる重症な副反応としては、アナフィラキシー症状、急性散在性脳脊髄炎等がみられます。

その他、一定の頻度で認められる副反応は、倦怠感や膨張、発赤、痛み、頭痛などですが、どれも軽いもので、自然と数日でおさまります。

※母子感染予防のために抗HBs人免疫グロブリンと併用してB型肝炎ワクチンの接種を受ける場合は健康保険が適用されるため、定期接種の対象外となります。